

審査員講評

■日本画

評 岡部 巖

昨年に比べ出品数が幾らか少なくなりましたが、それでも今年も力作ばかりであり、大変喜ばしいことだと思います。

市展賞「秋嵐」落ち着いた色彩の中で様々な技法を駆使し、且つ仕事も丁寧でよくまとめられており、作品に対する作者の姿勢に大変好感が持てます。市長賞「おかめ・舞う」画面構成に対する意識やモチーフの丁寧な描写など大変意欲的な作品です。背景の処理に関してはもうひと工夫欲しいと感じます。優秀賞「故郷の思い出・雪像作り」独自の世界観の中でモチーフ一つ一つ丁寧に描かれており、画面もうまくまとめられています。奨励賞「Twins Swing」作者の愛情が感じられる作品です。人物の配置もよく考えられていると思います。背景の処理がもうひとつというところでしょうか。佳作「桃色ぼたん」丁寧に描かれていて色彩も綺麗です。葉の配置など構図についてはもうひと工夫必要かなと感じます。

評 温井 喜央

飛騨市が文化行事に情熱を燃やしておられる姿をひしひしと感じました。どの作品も温かく、優れた作品ばかりでした。厳正に審査し、賞以外の作品にも何かを探ろうとする態度がみられ、あと一步の精進を希望します。

市展賞「秋嵐」画面構成は隙がなく、色と色の組み合わせが大変スマートに出来あがり、見せ所とそうでない部分のバランスが大変すばらしい。作者の技量と表現力が一致した作品となっている。市長賞「おかめ・舞う」まず作品を見て感じたのは現代的感覚で、構図、色彩、モチーフともに出品作品の中でも素晴らしい出来である。じっと見つめていると、引き込まれてゆくような魅力的作品。優秀賞「故郷の思い出・雪像作り」雪の降った小学校のグラウンド、それぞれの表情を持った子供たちを的確な描写力で描かれ、作者の気持ちのこもった作品である。作者のこれまでの人生が凝縮されているのかも。

■洋画

評 布山 淳一

一般の部市展賞の「物語の始まり」は、全体の画面構成がうまくまとまっていて、色彩も落ち着いており、作品の雰囲気を引き立てるものでした。市長賞の「宮川あじめ峡」は、川の流れの豊かさや瀬の表現が印象的で、手前から奥へと自然に視線を誘う構成も非常にうまくまとめられていました。優秀賞の「川の音」は、大きな作品に果敢に挑み、流れの変化をよく観察して、その様子を筆致によって巧みに表現していました。奨励賞の「Beyond the Silent Sea」は、奥行きを感じさせる構成と、空の表現が印象的な作品です。佳作の「循環」は三画面構成とし、現在と過去を対比させながら、緻密な表現によって環境問題を直接的に訴えかけている作品です。

青年の部奨励賞の「静物画」は、観察した対象が丁寧に表現されており、筆致にも好感が持てる作品です。「雨」は、色彩と表現を通して、若者の心情をよく伝えている作品です。「私を見ろ」は、今の自分自身の存在や心情を力強く表現した作品です。

評 山村 泰雄

一般の部の出品数が昨年より少なくなっていますが、時間をかけて描き込まれた作品が多く、審査をしても見応えがありました。市展賞「物語の始まり」は構図や色彩と共に、何かを暗示するような動物、女神、手、極彩色の海等によって作者の物語の世界に見事に引き込まれてしまう作品です。市長賞「宮川・あじめ峡」は美しい飛騨の風景を丁寧に描いています。とりわけ水と岩の表現が素晴らしい。優秀賞「川の音」は100号の大画面に水しぶきを上げて流れる川が力強いタッチで描かれ、まさに激しい水音が聞こえるようです。奨励賞「循環」は古代、宇宙、現代の3枚を繋いだ作品です。地球を汚し続けている現代を見る者に訴えています。奨励賞「Beyond the Silent Sea」は見下ろすと雲海、見上げると波打つ様な雲、これら雲の表現が魅力的な作品です。佳作の「山あいの鉄橋」「ベニスの方」「境界」

も含めて受賞作はそれぞれ構図や色彩が良く研究されていて、作者のオリジナリティが感じられる秀作揃いでした。青年の部は出品数が大幅に増え、大変嬉しく思いました。モチーフに真剣に向き合って描いている作者の姿が伝わってくる作品、自己の内面を勇気を持って描いている作品に好感が持てました。

■彫刻

評 松本 弘司

本年度は市展賞に該当する作品はありませんでした。市長賞の「滅」は、素材のおもしろさを、うまく引き出している作品で、好感が持てます。ただ髪の実現が表面的になり、頭との一体感が弱くなったのが、おもしろいところ。優秀賞の「制作のためのオブジェ1」は、彫刻らしいものを感じます。ただし布を使った表現には、違和感を覚えます。布を別の素材（木とか鉄とか）で作るか、布を固めて頭部と一体感を求めると色々な工夫をされると、立体としての存在感がもっと出るのではと思います。奨励賞の「鳥とお話」は、形の見えない音を立体の中で現わそうとしてみえるのはおもしろいと思います。

「Hitomi 26」は、小ぶりながら彫刻としての空間感をしっかり表現しています。佳作「鷹匠」「瞬間」は、一生懸命作っておられるのを感じます。

青年の部「育む者」は、テラコッタの持っている縄文土器の雰囲気がおもしろいです。

評 森田 一成

今回、市展賞は該当無しとさせてもらいました。市長賞の「滅」は、段ボールや紙を巧みに用い、素材の特徴を生かした力強い造形と歴史を感じさせる表現が印象的です。優秀賞の「制作のためのオブジェ1」は、石膏の頭像と、布との組み合わせが興味深い作品ですが、布の形態にはもう少し明確な意図が欲しかったです。奨励賞の「鳥とお話」は、音が変化する仕掛けを取り入れ、鑑賞者との関わりを考えた楽しい作品となっています。「Hitomi26」は、人体を細部まで追わず、大きな流れを形にした造形が面白いです。足先を整理すると、さらに見え方が変わると思います。佳作の「鷹匠」は、人物と翼を広げた鷹の組み合わせに、動きが感じられます。台座との接地面の関係をもう少し意識してみてください。「瞬間」は、木の素材を生かした確かな技術が感じられる作品です。今後は彫刻的な表現への展開にも期待したいです。

青年の部「育む者」は、テラコッタという素材に挑戦し、自分のイメージを形にして出品した意欲を評価したいです。

■工芸

評 阪口 浩史

様々な素材の作品が並ぶ工芸部門は審査基準を統一できない難しさがあります。そうした中でも、それぞれの素材の持ち味が活かされ、個性溢れる作品を受賞に選びました。

市展賞の「大輪」は色紙と彩色された紙を用い、丁寧に切抜かれた紙を重ねて貼ることにより構成に奥行きがみられます。大輪の花と蝶に生き生きとした生命力が感じられます。市長賞の「swan」は竹ひごを編みこみ、張りのある胴部の造形に温か味と優しさが感じられます。隙間から漏れる灯りとの調和も見事な作品です。優秀賞の「蛸の休憩所」は鉄による下絵付け、乳白釉、コバルト釉の組合せにより海の景色が表現されています。波の造形と合わせ統一したテーマが見られる秀作です。

評 葛井 保秀

今年の作品の素材は木芸が1点と寂しかった。私が勝手に飛騨市だからと期待したからでしょうか、加工の難易の影響によるものでしょうか。また木に限らずいろんな素材もあるので、挑戦してみたり、またどこにでも出かけて自分に合う何かを求める姿勢も大切だと思います。

紙工芸「大輪」は主題の菊の大きさや色彩配置に優れ、華やかで楽しい秀作でした。「swan」は立体空間の使い方が理を得ていて、無理なく自然な感じを美しく出していました。「蛸の休憩所」は海岸の情景の演出に優れ、前後に配したポケットも空間の変化を与え、そこに何かを飾っても楽しめます。八角形透かし鉢「人生」は透かしと内壁の色彩配置が思わず題意を感じさせました。「巡る」は作者のものの作りに対する愛情を感じました。何か主題となるものを大きく表現出来ればもっと楽しくなると思います。「私の夏」は大画面に配置した紋様が良かった。アシンメトリーにしてもいいかもしれないです。

■書

評 船坂 久華

一般の部市展賞「趙孟頫」は、中国南宋時代に書画の分野で活躍した文人、趙孟頫（ちょうもうふ あざな すこう字は子昂）作の漢詩を隷書で仕上げた大作。起筆の力強い筆勢を逃すことなく気力充実した送筆、点画間の適切な余白、文字の大小の安定した配置には制作者の練度と書法技術力の高さが感じられ、完成度の高い作品となっています。市長賞「趙甌北詩」は、生彩あるシャープな筆線と太細の変化ある点画を巧みに組み合わせた文字造形によって、漢字の中で最も古い書体である篆書（古代文字を含む）を現代的で躍動感ある作品に仕上げています。優秀賞「銀河行」は、勢いある豊かな筆致で書かれた三行が互いにうまく呼応し合い、文字の大小や墨の潤渇を活かした立体感ある漢字仮名交じり作品となっています。奨励賞「黄州寒食詩巻跋」は、原帖の字形の特徴をととてもよく捉えています。奨励賞「明智高行」は、安定した線質と書きぶりが評価されました。

評 高田 直子

「書道」がユネスコ無形文化遺産へ登録される見込みで、書道の魅力を国内外に向けて発信する新たな節目を迎えています。

今回の市展も、高校生の若い世代が古典の臨書に果敢に挑戦。歴史上の名品に学んで創造革新を目指すことは、原点回帰にもつながり大いに推奨されます。出品作品のなかでも奨励賞の「臨風信帖」は空海の行草書のリズムがうまく表現されており、又「臨蘭亭序」は王羲之の特徴をよくとらえております。

「臨崔子玉座右銘」は爽やかな線質で書かれ、作品全体が引き締まった若々しい隷書作品に仕上がっています。残念だったのは、日本の伝統文化の「かな文字」の作品が出品されていなかったことです。「高野切」「寸松庵」「香紙切」など、仮名文字表現に適した筆と墨と紙で新たな挑戦を期待いたします。

■写真

評 田中 清文

ひさしぶりの飛騨市美術展の審査に、地に利を生かした飛騨の自然表現が見られるのを楽しみにしていました。

フィルムの時代から、写真は光と瞬間の芸術と言われて参りました。今やデジタルカメラが販売され、携帯カメラ付きスマートフォンの時代、AI・デジタルコラージュ作品が幅を利かせていますが、写真本来の表現は撮影者が被写体から何を心で感じたか本質を表現することにあると思います。

市展賞「かまどのある暮らし」電気・ガスのスイッチ一つで済む便利な日常を、重厚な土間で、かまどを使い煮炊きする昭和の時代を連想する作品に、作者の視点が感じられます。市長賞「厳冬を生きる」猿をテーマに追いかけてか、偶然の出会いが、瞬間を作品にされました。雪の立木の木の芽を剥いで食する自然の厳しい姿に、人間の自我から招く、自然災害を感じずにはおれません。優秀賞「春の親子」白鷺と桜スナップを美しく捉えていますが、むしろ AI 作品か？空気感が感じられたら評価は変わるかも。奨励賞 2 作品はそれぞれのタイプが違う見せ方をしています。個性のある作品を選びました。入賞作品どれも美しく表現されていますが、見る人が作品から何を感じて頂けるか考えたとき作品は変わると思います。来年再チャレンジしてみてください。

評 浅野 則夫

今回初めて飛騨市美術展の審査員を務めさせて頂き、飛騨市の写真を愛する人達の一生懸命さに感動しました。しかし青年の部の出品が一点しかなく、どこの地域でも、若い人達の参加が少なくなっていることに寂しさを感じました。

市展賞「かまどのある暮らし」は、かまどの前で一人の女性が作業をされているのを撮った作品ですが、色合もすばらしく、懐かしさを感じる一枚に仕上げられています。市長賞の「厳冬を生きる」は、一匹の猿が凍りつく冬の吹雪の樹上で寒さに耐えている姿をよく表現しています。優秀賞の「春の親子」は、桜の花が満開の中で、白鷺が二羽、青空をバックにたわむれている様子が愛らしく感じられました。